
とある都市の事象選択 《オールセレクト》

ITEM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オールセレクト
とある都市の事象選択

【Nコード】

N7279X

【作者名】

ITEM

【あらすじ】

学園都市にある少年がいた。学園都市第二位の垣根帝督、“幻想殺し” 上条当麻を親友に持つ彼はある問題を抱えていた・・・。
それは彼が人知を越えた力を持っていること。※この小説は中二病にご
都合主義、さらには主人公はほぼ無敵ときて
います。それでもokと いう方はどうぞ暖かい目で見守ってください。
い。

プロローグ（前書き）

祝初投稿です？なにとぞよろしくお願いします？・

プロローグ

『窓のないビル』

その建物は高層ビルが多く建ち並ぶ学園都市第7区に建っている。その名の通りにその建物には窓がない、それどころか中に入る入り口すら見られない。この異様な建物こそ学園都市のトップ、統括理事長アレイスター・クロウリーの根城である。

特殊な液体で満たされた培養器の中で逆さに浮いており、大人にも子供にも男にも女にも見える容姿を持つ学園都市統括理事長の前に、一人の少年がズボンのポケットに手を入れながら立っていた。

重苦しい空気を打破するかの様に少年が口を開いたことから物語は始まる。

第一話（前書き）

第一話完成したんで投稿します〇（＾▽＾）〇 早くも中二病満載
ですね（＜―＞）

第一話

「いー加減人の夢の中に現れんのやめてくれねェ？寝起き悪いし寝不足になるし最悪なんだけど？」

黒をベースとしたパジャマに身を包み、左右違った色の瞳を持つ鮮やかな茶髪の少年^{かみき やまと} 神鬼大和は悪態をつく。

「君の夢に現れたのは君に用があるからだ。」

「当たり前だボケ。用もねェのに出てきたらブツ殺すぞ。」

まアコイツが夢に現れるのはよくあることだし、もう慣れた。ハアゝとため息を付くと大和はアレイスターに用件を聞く。

「で？何の用だ？どうせ仕事だろ？さっさと内容話して消えろ。」

「仕事は仕事だか君が思っている様な内容ではないぞ。」

「あア？どオゆう意味だそれ？いつもの掃除じゃねェのか？」

掃除と言うのは学園都市の暗部用語の一つで殺しや破壊活動のことを指す。

「君には柵川中学という学校に通ってもらう。」

「・・・悪イもつかい言ってくれや。」

「何度でも言おう、君には柵川中学という学校に・・・「消えろカス」」

続きを聞きたくなかった大和はアレイスターの言葉の上に言葉を重ねる。

「酷いな。君がもう一度言えと言うから言ったのに・・・」

「ふざけんじゃねエぞコラ？何でオレがんなことしなきゃなんねエんだよオ？今更学校に通えだア？小学校に通わせなかったのはどこのどいつだア？」

「説明は最後まで聞きたまえ。何も君に青春を謳歌してもらおう訳ではない。」

「ますます意味わかんねエよ。その学校の先コーでも殺すのかア？」

「その学校に近々二人の少年が入学してくる。名前は垣根帝督、上条当麻だ。」

「それがどォした？」

「彼らはいずれ私のプランに大きく影響する者たちだ。頭の回転が早い君ならもうわかってもらったと思うのだが？」

「オーケーオーケー理解したよ。つまりアレだなアソイツらと同じ学校に通いつつ護衛と監視の両方やれてことだなア？」

「理解が早くて助かるよ。」

なるほど護衛と監視か。それなら学校に通えというのも何とか納得できる。だが、ここで一つ疑問が生まれる。アレイスターに質問しようかと思ったがどうせプラン関連の質問には答えてくれないと思ったのでやめておいた。

「因みに垣根帝督は近い将来、学園都市の第二位となる者だ。君の手に負えるかな？」

アレイスターは嫌味にも聞こえる質問をしてくる。だが大和はそんなこと気にすることもなく吐き捨てる。

「誰に言ってんだア？未来永劫オレに勝てるヤツは存在しねエよ。」

第二話（前書き）

第二話できました〇（＾▽＾）〇 駄文ですみません（＜|＞）

第二話

突然言い渡された学校通学命令という最悪の夢から目覚めた大和はポリポリと頭を搔く。

アレイスターが言うには入学式は二日後、入学に必要な手続きや入学後の教科書などはこちらで用意することだ。

と言ってもすでに学園都市最高クラスの頭脳を持つ大和には必要ないものなのだが、形だけでも揃えておかなければ不審に思われるかもしれない。

（とりあえず今何時だ？）

時間を確認するため大和は枕元にあった携帯電話を開ける。

現在時間 AM 8…48。

普通に学校に通ってる者なら遅刻確定の時間だが学校に通っていない大和からすればかなり早い時間だ。

（二度寝って気分でもねエしなア・・・ちィとばつか早エけど起きるかア）

ベッドから身を起こすと顔を洗うために洗面所へと向かう。大和の自宅でもある学生寮は学園都市の中で一、二を争う大きさを持つ。アレイスターからプレゼントなのだが、一人で住むには広過ぎるため大和からすれば普通の学生寮の方が良かったのだ。

顔を洗い、歯を磨き終わると大和はコンタクトレンズを付け始める。別に大和の視力が悪いのではなく、ある理由からコンタクトレンズを付けているのだ。

（腹減ったなア・・・自分で作んのもメンドオだしファミレスでも

行くか・・・)

ファミレスで朝食を摂ることにした大和は素早く服を着替え、身支度を整えると学生寮を後にする。

学校の登校時間が過ぎたこともあってか歩く人の数は少ない。本来ならこの時間に学生が出歩いていることがおかしいのだが、そんなことどこ吹く風と言わんばかりの堂々とした態度で大和は歩く。いつも通りに近道として使っている路地裏を通っていると何やら人らしきものがうずくまっていた。

(何だこりゃ？人か？)

近くで見ると、それは小さな女の子だった。見たところ髪も乱れているし、着ている服もボロボロだ。出来れば面倒事は避けたい大和だったがほっとく訳にもいかなかったのでとりあえず声を掛けてみた。

「おい？大丈夫か？生きてるか？」

「・・・ん、此処は・・・？」

意識はある、どうやらまだ生きてはいるみたいだ。

「お前、いくら夏だからってそんなカッコで寝てたら風邪引くぜ」
「・・・超ほつといってください あなたには関係ないことです」

せっかく声掛けてやったのにこれかよ。普段ならこのままほっておくのが今日ばかりは何故かそんな気にならなかった。

「まアそう邪険にすんなよ お前朝メシは食ったかア？」

「いえ・・・まだですけど・・・」

「じゃ丁度いいやゝ今から朝メシ食いに行くからお前も一緒に来い」
そう言うのと大和は少女の腕を掴み半ば強引に引っ張って行った。

「えっ？ ちょっと！！ 何処連れて行くんですか！？」

「いらっしやいませ！ 何名様ですか？」

ウェイトレスの元気な挨拶が二人を出迎える。若干少女のカッコを見て顔をしかめたがすぐにいつもの営業スマイルへと戻す。

「二人 できれば奥の席を頼む」

あまり人の目に付く席は好きではない大和はいつも通り奥の席を指定する。それに少女のこともあるのでなおさら奥の方が好都合だ。時間が時間なだけに店の中にはほとんど客はおらず、希望通りに奥の席へと案内された。

「ほらよ、メニューだ 好きなもん頼め オレが奢ってやるよ」

少女にメニューを渡しながら大和は言う。少女はまだどこか警戒している様だが、小さな声でありがとうございますと言うとメニューを受け取る。

少女にメニューを渡したところで改めて大和は少女を見つめた。

（歳は・・・大体小学生高学年ぐれエか？ 見たところ学校に通って

る感じはしねエな　にしてもコイツ・・・」

間違いない、コイツは裏の人間だ。大和は同じ裏の人間としての直感でそう推定した。長年学園都市の暗部として活動していたためか、表の人間か裏の人間かは直感でわかる様になっていた。あまり嬉しいものではないが・・・。

「あなたは決まりましたか？」

少女が大和の顔を覗き込む様に尋ねてくる。大和がファミレスで朝食を摂る時は決まってサンドウィッチを注文する。

「あア大丈夫だ　とりあえず注文すつか　すみませ〜ん」

一通り注文し終わると大和は本題を切り出す。

「お前何があった？ただあそこで寝てた訳じゃねエだろ？」

「あなたには超関係ないことです」

やっぱりこうきたか・・・まア仕方ねエかア

「お前裏の人間だろ？」

その言葉に少女は手に持っていたコップを落としそうになる。

「どっとうしてそのことを!？」

「ダメだなア　そんなに動揺しちまったらバレんだろ？まアそんな

ボロボロじゃせいぜい下っ端だろオがな」

まるで自分も裏の人間ですと言わんばかりに話す大和。事実大和はアレイスターの右腕として暗部に君臨している。

「まァいい、まだ名前聞いていなかったなァ お前名前は？」

「絹旗・・・絹旗最愛です」

「じゃ絹旗、何があったんだァ？そのカッコじゃかなり過激な仕事だったみてェだなァ」

再度尋ねてみるが絹旗黙り込む、やはりまだ警戒しているのだろう
か中々話そうとしない。

（まったくメンドクセエヤツだなァ・・・まァでも一度乗っちゃった
船だ、最後まで面倒見てやるかァ）

「絹旗、警戒してんなら安心しろ オレもお前と同じ裏の人間だ
それもお前なんかよりもずっと深いところにいるな」

絹旗の顔に驚きの色が浮かぶ。それもそのはずだ。いきなり声を掛けてきた少年が自分も同じ裏の人間ですと言うのだから。

「だから安心して話せ 少なくともオレはお前の思っている様な裏
の人間とは違エから」

その言葉に安心したのか、それとも緊張の糸が切れたためか何時の間にか絹旗の目には涙が浮かんでいた。別に泣かすつもりはなかったのだが・・・。

「そうですね あなたになら話しても大丈夫みたいです。」

そう言って絹旗が話し始めようとした時だ、ファミレスにはおおよそ似合わない全身黒尽くめの男が数人、二人の席の前に立っていた。

第三話（前書き）

第三話完成！相変わらずの駄文

第三話

全身黒尽くめに見るからに屈強そうな体格と、ファミレスにはおおよそ似合わない数人の男が大和と絹旗が居る席の前に立つ。

「何だテメエら？朝メシの邪魔なんだよ さっさと消えろ」

「君に名乗る必要はない 朝食の邪魔をしたなら謝ろう 用が済めばすぐに消える」

そう言う男は大和の前に座っている絹旗を睨みつける。

「こんなところに居たのか被検体E-57、戻るぞ まだスケジュールが詰まっている」

男は絹旗の腕を掴むと無理矢理連れて行こうとする。だが、絹旗も必死に抵抗している。それな身体も小刻みに震えている。

（あアなるほどなア そオゆうことか・・・）

一連のやり取りを見て大和は絹旗に何があったか理解した。おそらく絹旗は置き去り（チャイルドエラー）か何かでコイツらに無理矢理裏の仕事をやらせれていた。それに絹旗のことを名前ではなく、被検体と呼んだ。どうせ訳のわからない実験も強要されたのだろう。

（仕方ねエ、助けてやっかア）

「オイ、オレは今コイツとメシ食ってんだよ 朝メシの邪魔して申し訳ねエと思っただったらさっさと消えてくんねエかなア？」

「あア！？テメエ誰に口聞いてやがる！？」

男の言葉が先程までの丁寧なものから一転して乱暴なものに変わる。だが、大和は臆することなく言葉が続ける。

「テメエに言っただよクソ野郎 それとも何か？言葉が理解できねエのか？脳ミソまで筋肉で出来てんのか？」

ヘラヘラと笑いながら大和は男をバカにする。さすがに男も我慢の限界が来たのか、その屈強な腕で大和の胸倉を掴むとそのまま持ち上げてしまう。

「このクソガキ！！調子に乗りやがって！！」

腕を大きく振りかぶると大和の顔を殴りつける。男の拳は綺麗に大和の顔に入った。中学生が大人に本気で殴られたら普通は泣く、泣かなくとも痛がるはずだ。

「おーおー中々いいパンチだなア 是非ともボクサーへの転職をオススメするぜ」

殴られたはずの大和は泣くどころか、痛がる素振りすらも微塵も見せない。まるで何事もなかったかの様にケロっとしている。その光景に殴った男はもちろん、その様子を間近で見ていた絹旗や他の客店の従業員も驚いていた。

「てっテメエ・・・何でくらってねえんだよ！？」

「あア？簡単だ、今テメエがオレを殴ったっていう“事象”を“拒絶”しただけだ つまりオレがテメエから殴られたっていう事実は存在しなくなる」

大和の隣を歩きながら絹旗は尋ねる。さっきの光景を見る限り大和は明らかに能力者、それもレベル4以上の大能力者クラスの……。

「その“あなた”ってのやめてくんない？ 気持ち悪くてかなわねエんだけど」

「私はあなたの名前を知りません」

「あれ？ まだ言っていなかったか？ 神鬼、神鬼大和 大和って呼んでくれや」

「では改めまして大和さん、大和さんは能力者なのですか？」

出来れば能力を使わずに追い払えば良かったのだが思わず能力を使ってしまったので、もう言い逃れはできない。仕方ないと思って大和は自分の能力を絹旗に説明することにした。

「お前の言う通りオレは能力者だ 神鬼大和、レベル5の《事象選択》（オールセレクト）だ」

「れっレベル5なのですか！？」

「ハァゝだから言いたくなかったんだよオ……レベル5って言うったら騒がれるから……」

「普通騒がれますよ！ と言うか騒がない人なんていませんよ！」

「同じレベル5なら騒がないんじゃないやねエ？」

「そっそれはありますね……」

『レベル5』 それはこの街に住む学生にとって憧れの、同時に畏怖の対象となる存在。一人で軍隊相手にケンカを売れるレベル5は自然に多くの憧れを生む。だが、それだけでは済まないのがレベル5だ。憧れは同時に嫉妬の感情を生む、強過ぎるその力は恐怖の対象ともなる。

『化け物』

大和も幾度となく、そう呼ばれた。

そう揶揄されても仕方がないのは大和自身が一番良く理解している。

「大和さん！聞いてますか！？」

どうやら思考の渦にはまっていたようだ。絹旗が自分に向かって何やら避けている。

「悪い悪い、ちィと考え事してたわ で？何だ？」

「大和さんのその・・・《事象選択》ってどんな能力なのですか？」

「オレの能力はこの世の全ての“事象”、簡単に言えば起こった出来事に対して選択できる力だ」

「うーん・・・よくわかりません」

「例えば・・・さっきオレが殴れた時、ケロっとしてただろ？あれは『殴られた』って事象を『殴られなかった』っていう事象に変えただけだ」

「とんでもない能力ですね・・・」

「それは自覚してる でも無敵って訳じゃねェからなア」

「あの最後の蹴りも能力によるものですか？」

「あれは・・・また別のもんだ、あれに関しては深くは聞くな」

大和はこれ以上の散策に釘を打つ。それ以上は学園都市の闇に繋がれると思ったからだ。絹旗も裏の人間だが、まだ表に近い闇だ。大和のいる世界は一寸先も見えないぐらいの深い闇、関係のない者を巻き込む訳にはいけない。

「お前、これから行く当てでもあるのか？」

話題を変えるために大和はふと思い付いた質問をする。

「いえ・・・私は置き去りですから行く当てなどありません・・・」
「なら、暫くオレの家に来い 知り合ったのも何かの縁だ、面倒みてやるよ」

絹旗はポカンとした顔している、理解が追い付いていないのだろう。だが直ぐに我を取り戻すと困惑した表情を見せる。

「いいのですか・・・？」

「別に構わねエゼ 丁度広過ぎるから困ってたんだよ」

「では、お世話になります・・・」

こうして、少年と少女の奇妙な同棲生活が始まったのだった。

第四話（前書き）

話が全く進まない（^ー^；）

第四話

絹旗とも同棲生活が決まった日の夜、大和はアレイスターに呼び出されていた。どうせ今朝のことだろうと、大和はこれから聞くことになるだろうアレイスター統括理事長様のお説教にげんがりしていた。

因みに、絹旗は家に着くと直ぐに寝てしまった。大和としては彼女の衣類や下着を買いに行くつもりだったのだが無理に起こすのめ気が引けたので、そのまま寝かすことにした。

（アレイスターの野郎も一々細けエヤツだなア あれぐらい見逃してくれてもいいじゃねエか・・・）

そんなことを考えている内に『窓のないビル』に辿り着く。それを見計らったかの様に案内人が現れる。

「また何かやらかしたのですか？大和君」

「ちいとばっか能力使って暴れただけだ、別段騒ぐことでもねエよ」

「君の場合ちよつとでは済まないでしょう・・・」

「うるせエな、さっさと中に入れろや こっちは今から聞くお説教にテンション最悪なんだよ」

さっさと終わらせて家に帰りたい大和は案内人に中に入れるよう急かす、案内人にも早くしたいのかこれ以上は何も言わず大和を中へと案内する。

中に入ると直ぐにアレイスターの前に立つ。表情をほとんど見せないアレイスターだが、その顔が呆れた表情を見せている気がするのめは気のせいだろうか。

「あれ程往来で力を使うなど言っているのに・・・どうやら馬の耳に念仏のようだな君は」

やっぱり怒っている。いや、呆れているのかもしれない。いずれにせよ大和にとって面倒な状況であることには変わらないのだが。

「仕方ねェだろ？能力使わなきゃオレがKOされちゃったよ」

「私が言っているのは能力の使用についてではない・・・“聖人”の力を使用したことについてだ」

“聖人”という単語に大和はピクリと反応する。・・・やっぱりバレたか、恐れいるよアレイスター様。

「聖人は本来なら魔術側の所有物だ、なのに君は能力者でありながら聖人の力をも持つ　これが魔術側に漏れれば何かしら問題へと発展する　君とて厄介事は避けたいだろう？」

「・・・・・・・・」

「その上君の場合はそれだけでは収まらない　君の持つ力は科学と魔術を根底から覆してしまうものだ」

「アレイスター」

そこまで言うとうとうやく大和が口を開く。大和がアレイスターを見る目には明らかな敵意の色が浮かんでいた。

「オレは確かにお前の右腕だ、だが犬にまで成り下がった覚えはない　お前の憂いを晴らすためにオレは存在する、お前はオレの起こした問題を解決するために存在する、違うか？」

目だけではなく、その言葉にも敵意が含まれている。元々大和は人の言う事を素直に聞く人間ではない、それが統括理事長であっても

だ。

「つまり協力はする、だが命令は聞かない、そういうことか？」

「そオゆうこった、あの時から何一つ変わらねエスタンスだ 科学
てか魔術とかがどオなろうが知ったこっちゃねエ オレの障壁にな
るんだったらブツ潰すだけだ」

最後に大和は何か言おうとしたが何も言わなかった。だがアレイス
ターには大和が何を言おうとしたかはすぐにわかった。

邪魔するならお前も容赦はしない、と。

「もオいいだろ？ さっさと家に帰らせろ、365日24時間逆さで
浮いてるだけのお前と違って疲れてんだよ」

大和は回れ右をして案内人を呼び出そうとする。

「では最後に一つだけ聞かせてくれ」

「なんだよ？」

「君は自宅に少女を連れ込んでいるようだが、まさか君はそういつ
た趣向の持ち主なのか？」

「紛らわしい言い方してんじゃねエ！！！！！！ 誰かに勘違いされ
んだろオがア！！！！！！ あとオレはロリコンじゃねエ！！！！！！
！」

「君がお望みと言うならもっとその気になる環境を提供するが・・・
」

「人の話しを聞けエエエ！！！！ その気になるってどんな環境な
んだよオオオオオ！！？」

先程までのシリアスな雰囲気을 ブチ壊すかの如く、大和の怒声が窓

のないビル内に響いた。

「やれやれ、彼を怒らせてどうするつもりですか？本気で怒らせれば一番困るのは貴方でしょう」

大和を外へと送り、戻って来た案内人は上司であるアレイスターのため息を吐く。

「彼が暴走しても君なら彼を止めることができるだろう？」

「冗談言わないでください 彼とともにやりあってタダで済む訳ないでしょう・・・」

案内人は今日何度目になるかわからないため息を吐く。こんなことが毎回毎回続いていたら、胃が保たない。そろそろ本気で転職を考えそうにもなる。

「よろしいのですか？彼をほっておいて、あの様子では“聖人”の力だけでは済みませんよ？」

「それだけの利用価値が彼にはあるということだ」

アレイスターはニヤリと微笑む。一見優し気な微笑みに見えるが、アレイスターという人物を知る者が見れば邪悪な微笑みとを感じるだろう。

「彼の起こす問題など利用価値に比べれば微々たるものだ、例えば魔術側と戦争になろうとも彼に勝る者など存在しない」

「まアそれは言えてますね、魔神クラスの魔術師でも引っ張って来なければ話しにすらなりませんしね」

アレイスターとしても戦争というのは最後の手段だ。仮に科学と魔術の間で戦争が勃発すれば学園都市もタダでは済まない。当然大きな被害も出るだろう。だがどんなに大きな被害が出ようが、学園都市の敗北はあり得ない。これだけはアレイスターは確信している。ファイナルウェポン彼がいる限り、神鬼大和という名の最終兵器がこの街に存在する限り……。

「プランはこれまで通り継続する」

「……彼の邪魔が入るかもしれませんが？」

「何も問題はない 彼の妨害もプランの一部なのだから……」

だが、アレイスターはまだ知らない。彼がそのプランを叩き潰そうとしていることを。

そして、彼は知らない。自分自身がそのプランであることを……。

第五話（前書き）

次話からかなり時間が飛びます（汗）
れです

後先考えなかった結果がこ

第五話

「ふわァ〜眠みィ　こりゃァ明日も寝不足確定コースだな」

窓のないビルから脱出(?)した大和は一人学園都市の夜道を歩いている。普段ならこのまま自宅へ帰るのだが、一つやり残したことがあるので、自宅のフカフカベッドへダイブはまだお預けだ。

大和はポケットから紙を取り出す。その紙にはとある研究所への地図が書かれていた。

(さてと、帰る前に一仕事すつか・・・)

地図に書かれている場所を確認すると、大和はニヤリと顔を歪ませる。

「“ゴミ掃除”といくかァ　クソ野郎共」

「何ィ!? 取り逃がしただど!? 貴様らはガキ一人連れ戻すことすら満足にできんのか!？」

「申し訳ございません・・・」

白髪の老人が屈強な男数人に怒鳴りつける。老人は白衣を着ているのでおそらくは科学者だろう。

傍から見ればかなりシュールな光景だが、この研究所の所長と部下という設定を加えれば納得もできる。

「しかし所長！邪魔が入ったのです！仲間も一人そいつにやられて・・・」

必死に男は弁明をするが、老人はさらに怒鳴りつける。

「聞けばその邪魔とやらもガキだったそうじゃないか！ 大の大人がガキに負けるとはどうなっておるのだ！？」

「いいやジイさん、そいつらは悪くねエぜ 相手がオレじゃ仕方ねエよ」

何処からともなく声が聞こえたかと思うと、突然凄まじい轟音がなり後ろのドアが破壊される。

破壊されたドアから誰かが中に入ってくる。

「こんばんは！お前ら全員殺しに来たぜ」

緊迫した空気には似合わない明るい子供の声が聞こえたかと思うと、その声の主である神鬼大和が堂々と部屋の中に入ってくる。

「貴様何者だ！？どうやって研究所に入ってきた！？」

老人が鬼の形相で尋ねるの対し、大和はハニカミながら答える。

「そんなの正面突破に決まってるんだろ？ わざわざコソコソと侵入する必要なんざねエからなア あっ困みに他のヤツらは既にご臨終だア あとはテメエらだけだから」

「所長！！こいつです！！こいつが今朝オレたちの邪魔をしたヤツです！！！」

「ん？テメエら今朝のクソ野郎の残りカスカア？あー残念だけどテ

メエらのお仲間にくたばってたわア」 一応急所は外したんだけど即死だったみてエだわ 安心しろ、死体はちゃんとゴミ箱に捨てたから♪」

何が可笑しいのか大和はゲラゲラと笑いながら目の前の標的にゆっくりと近づいて行く。

その目は獲物を狙わんとする野獣のそれだ。ただの野獣ならまだよかったのだが、彼らの前に居るのは学園都市最強の野獣だ。

「さアて今から三秒だけやつからその間に神サマにでもお祈りするんだなア テメエらみてエなゴミでも最期ぐれエは応えてくれるかもしれないねエぞ？」

「随分と勝手な事を言ってくれるな小僧、此処は科学の街だ 神頼みをするなどナンセンスだ それに・・・死ぬは貴様だ小僧！！！」

叫んだのと同時に老人は一気に奥のドアへと走る。

「お前たち時間を稼げ！！私はアレの準備をする！！！」

（時間稼ぎ、あのジジイ何かする気だな それに去り際に言ったアレってのも気になる・・・）

大和としては直ぐにでも後を追いかけたいが、アレイスターからは皆殺しにするようにと指示を受けている。大和は最初から皆殺しにする予定だったので問題はない。とりあえず目の前にある障壁から片付ける事にする。

「オレ相手に時間稼ぎったア面白エ 果たして何秒立ってられっかなア？」

悪魔の様な笑みを浮かべて学園都市最強の怪物が今狩りを再開する。

「何なのだあの小僧は！？一体どうなっている！？」

ある物の準備をしながら白髪の実研究者は叫び続ける。少なくとも此処に来るまで30人は居たはずだ。それをあの小僧は皆殺しに言った。あり得ない、高々中学生ぐらいの子供がそんなことができるなど。

だが、こちら側には切り札がある。まだ試作段階だがその威力は置き去りを使った実験で確認済みだ。

勝てる、絶対に。

そう確信した時だった。

「よオジジイ、準備とやらは終わったかア？」

先程の様にドアを破壊する事なく大和が絶望と共にゆっくりと入って来る。意地悪そうな笑みを浮かべながら。

「貴様・・・先程のヤツらはどうした？」

「あアあんなヤツらで時間稼ぎ出来るとでも思ってたのかア？舐めてんじゃねエぞコラ」

首をコキコキと鳴らしながらとんでもない事をサラリと言っている。見たところ傷どころか汚れ一つない。

一体この小僧は何者なのだ？

ますます疑問が生まれる。

「随分と強い者のようだな　だが貴様もここまでだ」

白髪の実験者は白衣から何かを取り出す。それは何かのスイッチのようだ、アレというのはこれの事だろうか。

「何だそらや？爆弾でも爆発させるのかア？無駄だから止めとけ、
デメエだけ吹き飛ぶぞ？」

「ふん、科学者たる私が爆弾なんぞ物騒なもの使うと思うか？爆弾
なんかよりも強力なものじゃ」

そう言うのと白髪の実験者はスイッチを押す。

キィィィィィィィィンと甲高い音が鳴ったかと思うと突然の頭痛が
大和を襲う。

「デメエ・・・何しやがった？」

「こいつはキャパシティダウンといって能力者に反応する装置だ
その様子を見る限り貴様は高能力者のようだな」

「・・・」

「どうした小僧？さっきまでの虚勢は？あまりの苦痛に言葉もでん
のか？」

白髪の実験者は自分に酔ったかの様に言葉を続ける。

「アハ、アハハハハハハハ！！！！こいつは傑作だア！！」

何か切れた様に大和は突然大声で笑い出す。何かに操れているか
の様に、いつまでもいつまでも。

「何故だ・・・？何故キャパシティダウンが効いていない！？」

「バカだろテメエ？そんなもんで勝てると思ってたのかよオ？抱きしめたくなくなるぐれエ哀れだぜテメエ」

ようやく笑い終えたのか大和はゆっくりと話し始める。

「何で効かねエのか？簡単だ、そのキャパシティダウンとやらの音を聞いたっつう事象を拒絶しただけだ」

「事象を拒絶しただと・・・そんなこと出来る訳が・・・！？」

ジジイが何かに気付いたのか、その顔がみるみる内に青ざめていく。

「まさか貴様、“事象選択”か！？」

「ようやく気付いてくれたかよ、気付いてくれたお礼に最高にキツイ死をプレゼントしてやる」

そう吐き捨てると大和はゆっくりと白髪の実験者に近く。実験者は逃げようとするが素早く前に回り込むと、動けない様に両足を骨を砕く。

「ギヤヤヤアアアア！！！！？？？？？」

激痛のあまりジジイは大声で悲鳴をあげる。痛みからか、それとも恐怖からその目には若干涙らしきものが見える。

「待ってくれ！！！！わしを殺してみろ、貴様統括理事会から睨まれるぞ！！！！」

「あア？どオいう意味だそれ？」

「キャパシティダウンを製造するように頼んだのは他でもない、統括理事会だ！！！！」

「!?!?、・・・・なるほどなア」

「わかったか? わかったなら早くわしを・・・・」

それ以上言葉が続くことはなかった。何故なら大和がさっきの男から奪った銃で頭をブチ抜いたからだ。

さっきのジジイの言葉で大和はこの仕事の本当の目的を理解した。

（最初から妙だと思ったんだ　こんなクソみてエな簡単な仕事何でオレにやらせたのか・・・）

今回の仕事はただの研究所の破壊と研究員の皆殺し、規模の大きい研究所ならまだしも、大して大きくもないこんな研究所の掃除に学園都市最強の戦力を使うこと自体がおかしいのだ。

（アレイスターのヤツ・・・・オレを実験台に新兵器キャパシティダウンの性能を試しやがったな!!）

あの研究者は最期にキャパシティダウンは統括理事会の命令で製造したと言った。統括理事会が下した命令をそのトップであるアレイスターが知らない訳がない。

つまりアレイスターは対能力者用の新兵器があるのをわかって大和に仕事を命じたのだ。

（事前情報がいやに少なかったのも、オレを実験台にするためと考えりゃ合点がいく　絹旗のことに関してもとやこや言わなかったのも全てはこれに繋げるためか・・・・）

クソったれが

大和は齒軋りをし、怒りを露わにする。

利用されたことに怒りを感じている訳ではない。今に始まったことではない。元々大和とアレイスターはお互いを利用し合う関係でしかないのだから。

大和が気に食わないのはこんな安い仕事、新兵器の性能の確認という仕事に学園都市最強の存在である自分が使われたことだ。

（面白エじゃねエかアレイスター テメエがその気ならこっちも利用させてもらうぜ 今にテメエのそのツラ真っ青にしてやっから覚悟しろよ!!）

そう決意すると大和は研究所を後にした。獰猛な笑みを浮かべながら・・・。

「理事長、大和君からの報告です 研究所は完全に破壊、関係者は全員始末したとのことです」

報告を聞くとアレイスターは満足そうな笑みを浮かべた。

「よろしかったのですか理事長？あのような内容の仕事を彼にやらせて 随分と御立腹でしたよ」

「今回の件は彼でなければならなかったのだよ その辺の雑魚を使ったところで新兵器の性能を確かめられなかったのですね」

「満足のいく結果は得られたのですか？」

「もちろんだ、お陰で素晴らしいデータが採取出来たよ」

理事長は何か得たものがあつたのだろうか？案内人からみれば対能力者というのが売りの新兵器が能力者の大和に簡単に突破されたと

いう欠陥しか見出だせなかったのだが。

「・・・新兵器は見事に大和君に突破されましたが？」

「彼があ程度の物で屈するはずがないだろう？私が見たかったのは新兵器の性能もだが、あの環境下で彼がどの位闘えるかが見たかったのだ」

「・・・それ彼が知ったら間違いなく殺されますよ理事長？」

「その心配はないよ 私が死ねば一番困るのは彼自身だ」
「・・・」

全く理事長には恐れ入る。殺されることは絶対ないとわかっているからこそ、ここまで彼を利用出来るのだ。

仮に大和が理事長に牙を剥いても何かしらの策が有るのだろう。

一体彼と理事長の駆け引きにいつまで付き合わされるのだろうか・・・。

新たな始まり（前書き）

宣言通り、時間がかなり飛びます（汗）
本格的に飛ぶのは次話からですが（汗）
何卒ご勘弁お願いします

新たな始まり

学園都市

東京の西部を切り崩して開発された街であり、学園の名が示す通り総人口230万人中8割が学生というまさに学生のための街。

「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っており、それに伴ってか科学技術もブツ飛んでおり、『外』の技術とは約20年程の差があると言われている。

そんな学園都市だが朝は『外』と同じ様に訪れる。

「学校だるいなァ」とか「今日サボっちゃおうかなァ」と学生が思う考えるのも、同じく学園都市も変わらない。

どの世界にいて基本的に朝はダルい、憂鬱なのである・・・。

「大和さ〜ん!!!超起きてください!!!朝ですよー!!!」

そんなモヤモヤを吹き飛ばすかの如く、元気な声が学園都市のとある学生寮に炸裂した。

主人公設定（前書き）

タイトルの通りです 途中ちょっとした変更があるかもしれません
（汗）

主人公設定

名前 .. 神鬼 大和 （かみき やまと）

性別 .. 男

年齢 .. 13歳

人物 .. 年齢的に本来は中学3年だが上条当麻、垣根帝督の護衛、監視のために統括理事会の権限で彼らと同じ高校に通っている。
アレキスターをも驚愕させる力を持つことから学園都市の“最終兵器”（ファイナルウェポン）と呼ばれている。

容姿 .. 髪の色は茶髪。髪型は鏡音レンの様な感じ。

身長はあまり高くなく、寧ろ低い方に分類される。

肌の色はアクセラレータ程ではないがかなり白く、右目が赤、左目が青と左右色の違う瞳を持つ。

服装は垣根とよく似たものを着るが、とにかく目立つものが多い。統括理事会級の権限を使って学校でも私服が着用できる様にしている。

性格 .. 超がつく程の攻撃的な性格で破壊志向が非常に強い。だが無意味な戦闘は好まない。

暗部の人間ながら喜怒哀楽が激しく、感情も豊か。

基本的には親切なのだが絹旗曰く、親切ではあるが優しくはないらしい。

生活 .. 物心ついた時から学園都市に住んでおり、現在は絹旗と2人で学園都市でも1・2を争う巨大な学生寮に住んでいる。

基本的に自炊はしないが、プロの料理人顔負けの腕の持ち主。
学園都市からの莫大な奨学金に加え、暗部での仕事料も貰っている
のでかなりの金持ち。

知能 … アクセラレータをも超える学園都市最高の頭脳の持ち主。

戦闘能力 … “事象選択”という能力に加え、“聖人”の力を持つ
つなど、学園都市最強の戦闘能力の持ち主。

アレイスター曰く、これはまだ大和の本当の力の一部らしい。

また鋭い観察力、状況を一瞬で把握する理解力、最適な選択を一瞬
で下す判断力をも備え持つ。頭の回転も早く相手の裏を突くを能力
も高い。

能力 … 事象選択

オールセレクト

発生した事象に対して選択権を持つことができる。

簡単に言えば、起こってしまった出来事をなかったことにしたり、
別の結果に変えたりすることができる。

未来の事象に対して選択権を持つことはできない、またこの能力の
使用者以外の人体に直接能力を作用させることはできない。

一度に選択できる事象は3つまで（ただし大和はある方法で最大9
つまで選択できる）

その他 … 頭脳明晰、容姿端麗という事もあってか“秀才美男”

（クールメン）という通り名で学校中の女子の羨望を集めている。

（本人は超がつく程嫌がっている）

自他共に認める超甘党で甘い物に対する情熱と執着心はL顔負けの
レベルである。

呼び出し（前書き）

タイトルって考えるの難しいですね

呼び出し

少女はどこぞ緑の恐竜顔負けのヒップドロップが大和に炸裂する。傍から見れば仲の良い兄妹、朝から騒がしい光景に見える。

少女が能力を使用していなければの話だが・・・。

「グフッ!!?? 絹旗テメエだから能力全開でそれすんなっていつも言ってるだろオがアアアア!!!!!!」

「いつ迄たっても大和さんが起きないからじゃないですか!!」

「もっと他に起こし方あんだろオがアアアア!!!!!! オレじゃなきゃ確実に死んでんぞオ!!!!」

「はア起こしてもらったのに文句ですか・・・昔はこんなんじゃないかったのに・・・」

「おいテメエ何遠い目してエんだ、ブチ殺すぞ」

朝早くから怒声をあげたのは神鬼大和、その外見からはわからないがこう見えて学園都市最強の能力者である。これから新しい1日が始まるというのにその顔は既に残業明けのオヤジの様な疲れ切った表情をしている。

学園都市最強に臆することなく強烈なヒップドロップ・・・改め殺人ドロップを炸裂したのは絹旗最愛、大和の同居人だ。

オフエンスアーマー

絹旗はレベル4の窒素装甲だ。身体の周りに窒素の膜を張る事で銃弾を防いだり、軽々と車を持ち上げたりすることができる。

そんな能力を全開にしたヒップドロップは本来なら地面にクレータ―が出来かねない威力を誇る。

“聖人”である大和とはいえ直撃すれば流石に痛いのだ。痛いだけで済むだけでもおかしいのだが……。

絹旗と同居生活を始めてから早3年が経つ。最初は何処かきこちなさがあったが今では本当の兄妹の様に接してくる。先程のやり方も前までなかったことだ。……殺人ドロップはやめて欲しいが。

「大和さん、今日は超どうしてこんなに早く起こすように頼んだのですか？」

朝食の食パンを口に運びながら絹旗は大和に尋ねる。

大和は学校ある時以外は基本遅寝遅起きの生活スタイルだ。今日は7月20日、夏休み初日だ。だから絹旗は大和が何故早起きをしたのか気がなったのだ。

「学校の担任から呼び出し喰らったんだよ 大和ちゃんは頭が超いいので先生のお手伝いをして下さい♪だとき こんな事になるんだったらテストでオールパーフェクトなんざ取らなきゃよかった……」

学園都市中の全ての学生を敵に回しかねない発言をする大和。

実年齢13歳の中学生なのに飛び級で高校に通っている時点で十分天才クラスなのだが、そこにオールパーフェクトときたら連行されるのも無理はない。

（次は超手抜いてやるか……）

次のテストに向けて最悪な計画を練っていると、ピンポンと自宅のチャイムがなった。

「はいはい、超今行きますよー」

いつも通り絹旗がパタパタと玄関へ小走りで向かった。

こんな朝っぱらから誰だ？ と思いながら大和は大和特製の超激甘カフェオレを飲む。

「大和さーん、超お客様ですよ」

「あア？ オレにか？」

大和は椅子から立ち上がると玄関へと向う。こんな朝早くから自分に客が来るのは久しぶりだ。

「よオ大和、おはようさん」

「帝督？ こんな朝っぱら何か用か？」

玄関に立っていたのは服の襟ぐらいまで伸ばした長い金髪にホストを彷彿させる服装、さらには端正なルックスの持ち主、大和の親友である垣根帝督だ。

「その様子じゃお前も小萌先生に呼び出されたみてえだな」

「お前もってこたア帝督もか？」

「ああそうだぜ なんでもバカ共の補習の手伝いらしいぜ」

この垣根帝督も大和と同じくレベル5、学園都市の第二位の能力者だ。大和程ではないが当然頭もかなり良い。

高校に入学して最初のテストで2人揃ってオールパーフェクトを叩き出した時は学校中の噂になった。

「当麻のヤツも補習のメンバーらしいぜ？」

「はっ、当然だろ アイツが補習メンバーじゃなきゃ誰が選ばれんだよ？」

今この場には居ないもう1人の親友、上条当麻をこれでもかとかばかりにバカにする2人。

どうせ今頃不幸だー！！とか言って頭を抱えてるのだろう。

「それにしても最愛ちゃん相変わらず良い子だな ありゃ将来有望だぜ？」

「バカ言ってんじゃねえよ あの野郎朝からオレ起こすのに能力全開でヒップドロップだぜ？そのどこが将来有望なんだよ？」

「はあ羨ましいなあ大和は 俺何か毎日1人で起きてんだぜ？」

「それが普通なんだよバカ オレの場合はちよつと特殊なだけだ」

「2人共、時間はいいんですか？超そろそろ時間ですよ？」

どうやら玄関で話している間に登校時間が近づいて来たようだ。絹旗が2人にその事を伝える。

「帝督悪いな オレ齒磨いたら直ぐ追いかけるから先に当麻のヤツ迎えに行ってくんねえか？」

絹旗から渡された歯ブラシ片手に大和は垣根に先に行くよう伝える。

「オーケーわかった　ゆっくり歩いとくから急がなくていいぜ　ア
イツの寮ここからそんな遠くねえし」

そう言うとき垣根は当麻を迎えに行くべく玄関から出て行った。

垣根は急がなくてもいいと言ったが、やはり友人を待たすのは気が引けるので大和は何時もよりスピードを上げて登校の準備をする。

「じゃあ絹旗いってくんぜ　出掛けんならちゃんと鍵閉めろよ」

「はいはい超わかりましたよ　いつてらっしゃい」

自宅を出ると大和は垣根に追いつくために走り出した。

予想外（前書き）

かなり無理矢理な展開です（汗）

感想、ご意見お待ちしております

予想外

大和の寮から当麻の寮まではそれ程遠くなく歩いて10～15分ぐらいで到着する距離だ。時間的にもまだ少し余裕があるので垣根はのんびりと当麻の寮へと向う。

（補習の手伝いってなににするんだ？まさか小萌先生の隣に立って教鞭を執るのか？）

これからの補習の内容を考えながら垣根は歩く。夏休み初日から学校に行かなきゃなんねえとはついてねえな。

「おーい！！帝督ウー！！」

声が出た方向を見ると大和がこちらに向かって走って来た。先程までの真っ黒なパジャマではなく全身赤をベースとしたその格好はホストの様だ。

よくエセホストと呼ばれる垣根だが大和の方がよっぽどホストに近いだろうと垣根は思っている。

「おう、随分と早えじゃねえか？」

「オレは人待たせんのが嫌いなんだよ 親友ときたら尚更だ」

長年暗部に身を置いてきたためか、大和は時間に関してはかなり気にする性格だ。特に人を待たすのを極端に嫌う。無論アレイスターは例外だが。

「なア垣根、補習メンバーって当麻以外に誰がいんのか知ってるか

「？」

「いや俺も当麻しか知らねえ　けど当麻がいるってことはあの2人も一緒だろ　何せ三バカ（デルタフォース）だからな」

「そりゃ言えてるなア　つかアイツらに補習なんざ小萌先生も大変だねェ」

「わかるぜその気持ち　俺だったら絶対投げ出すけどな」

そんな失礼千万な内容の会話をしている間に2人は当麻の学生寮に辿り着く。大和の住んでいる学生寮と比べるとかなり小さい建物だ。もつとも大和の寮が大き過ぎるだけなのだが・・・。

当麻の部屋の前に到着すると垣根はインターホンを鳴らす。何時もなら直ぐに出てくる筈の当麻だが今日にかぎっては中々出て来なかった。

聞こえてねえのか？と呟くと垣根はもう一度インターホンを鳴らす。だがそれでも当麻は出て来なかった。

「おい当麻！！お前補習だろ！！まだ寝てるのか？」

だが返事はない。折角の夏休み初日を見事に潰されたことでイライラしていた大和には我慢の限界だった。

無言でドアの前に立ち、ドアノブを掴むと一気に引く。

聖人の力で引かれたドアはカギ諸共破壊され、客人を中へと招き入れる。

「おい当麻、折角迎えに来てやったのにガン無視ったアいい度胸だなア　誰の為に朝から来てやったと思って・・・」

大和は途中で言葉を切らした、いや切れてしまったと言うべきか。ドアを潰して最初に目に飛び込んできたのは親友である上条当麻が銀髪の女の子に頭をかじられていた光景だった。それだけでも十分驚きの光景なのだが問題は親友の頭にかじりついている女の子は頭にフードらしきもの被っている以外は何も着ていない、つまり完全素っ裸だったことだ。

「おい大和どうした？何固まってんだ？」

後ろから垣根が顔を出す、目の前の衝撃的光景を見ると大和と同じく固まってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

超がつく程の気まずい空気が流れる。

垣根はポケットから携帯を取り出すとどこかへ電話をかけ始めた。

「あーもしもしアンチスキルですか？今目の前で親友が女の子に淫らな行為強要してるんですが・・・」

「ちょっと待て垣根えー！！！！誤解だ誤解！！！！」

学園都市の平和な朝に1人の少年の悲痛な叫びが響いた。

「理事長、“幻想殺し”が禁書目録と接触しました“未現物質”と大和君も一緒です」

「フフ、そうか・・・報告ご苦労」

案内人からの報告を聞くとアレイスターは満足そうに微笑む。

「よろしいのですか？大和君はともかく、未現物質の接触は完全に予想外でしょう？」

「確かに予想外だがプランの進行に支障はない　寧ろ好都合といったところか・・・」

「何が好都合なのですか？大和君はともかく未現物質の接触は完全に予想外でしょう？」

学園都市の最深部に生きている上に、本来なら魔術側の所有物である聖人の力をも持つ大和なら遅かれ早かれ魔術側に接触するだろうと予想できた。しかし学園都市の第二位である未現物質の接触は完全に予想外だった。

いくら大和の親友とはまさかこのタイミングで・・・。
そこで案内人は気付いた。アレイスターの狙いを。

「わざと未現物質を接触させたのですね・・・？」

「・・・何故そう思う？」

「簡単ですよ、あなたには『アンダーライン滞空回線』という絶対的な情報網がある　彼等の行動は逐一わかる、つまり彼等が禁書目録の居る幻想殺しの学生寮に向かっていいることもわかっていた筈です」

「それで？」

「本来に未現物質と禁書目録の接触を避けたいのであれば一時的に彼等を別行動させる事もできたし貴方ならこれぐらいの事何の造作もないことだ　だが貴方はあえてそうしなかった　最初から未現物質を禁書目録に接触させたかった・・・違いますか？」

アレクスターはただ黙って案内人の推理を聞いていた。何も言わずただ静かに。

数秒ぐらい沈黙が続いただろうか、アレクスターがゆっくりと口を開き始めた。

「素晴らしい推理だ　だが完全には正解ではないな」

「？」

「私は未現物質・・・垣根帝督と禁書目録を接触させたかったのではない・・・　彼を魔術と接触させたかったのだよ」

「・・・は？」

言っている意味がわからなかった。何故彼を？学園都市の第二位である彼を。魔術とは限りなく縁のない彼を何故？

「私が予想外と言ったのは彼が垣根帝督がまさかこれ程早く魔術に関わった事にだ　未現物質はまだ私にも、そして彼にも完全には解析出来ていなというのに・・・」

「言っている事の意味がよくわからないのですが・・・」

「“未現物質”とはどのような能力だ？」

そんなのわかりきっている。未現物質とは『この世に存在しない物質』を作りだす能力だ。未現物質の前ではありとあらゆる物理現象、自然の法則すらも通らないまさしく未知なる物質だ。その能力の応用性の高さは第一位をも上回ると言われている。

「では何故『能力者』は魔術を使用出来ない？ 借りに使用すればどうなる？」

それもわかりきっている。才能無き者が異能の力を使用するために産み出したのが『魔術』と呼ばれるものだ。能力者、一度でも脳の『開発』を受けた者は脳の回路が常人とは異なるため魔術は使用出来ない。仮に無理に魔術を使用すれば人体に甚大な損傷が出てしまう。

そこで案内人はハツとなる。

「理事長・・・貴方まさか・・・」

「君の想像の通りだ 『魔術を使っても人体に影響が出ない』という未現物質を生成すればどうなるか・・・ 彼とて自分の体内で未現物質を生成したことはあるまい」

「そんなこと不可能です！ 出来る筈がない！」

「何故そう言い切れる？ 君の言う通り未現物質は自然の摂理をもすら捻じ曲げることが出来る能力だ 決してあり得ない事ではあるまい」

「・・・・・・ッ」

「垣根帝督の性格だ 魔術に関わっていく内に必ず私と同じことを考える筈だ それは君も同感なのではないかな？」

その通りだ。学園都市最強の親友、神鬼大和をライバル視し、打倒アレイスターを掲げる彼なら目的を達成するために魔術を取得しようとするだろう。目的の為ならどんな危険も省みない・・・それが垣根帝督という人間なのだ。

「・・・何故彼に魔術を取得させようとするのです？ 貴方には大和君がいるでしょう・・・」

「使える兵士は多くいて困ることはない 彼が魔術を取得すればあちら側にとって脅威になることは間違いない それだけ優位に立てる 平和的な交渉においても、戦争においてもね・・・」

「！！ 戦争でも始めるつもりですか・・・？」

「フフ、まさか 私とて戦争は望まないよ 多くの労力と犠牲が伴うからね」

だが最後にアレイスターは今はまだね・・・と付け加えた・・・。

魔術（前書き）

お気に入り登録された方ありがとうございます。

魔術

「いやぁー正直かなり焦ったぜ 俺たち3人の友情も此処でジ・エンドかと思っただぜ」

先程の衝撃的な光景を他人事の如くゲラゲラと笑う垣根。

「お前・・・絶対楽しんでるだろ・・・？」

朝だと言うのにげんなりとした表情をしているのは今回の騒動の当事者である上条当麻。これから地獄の補習なのだが既に疲れ切ってしまうている。

「朝から大変だなアお前も 正直かなり同情するぜ」

そうは言うもの明らかに同情する気のない笑いを浮かべているのは今回の騒動の第一発見者の大和。

「テメー明らかに同情する気ねーだろ！！??？」

当麻の怒声を完全に無視した大和はくるりと向きを変えると、安全ピンを何十本もガラガラと光らせている修道服を身につけている女の子を見る。

「で？ テメエは魔術結社とやらに追われて逃げていると そんなもって頭ん中に10万3千冊分の魔術の知識が詰まっている 素っ裸だったのは当麻の右手に触れたから そうだな？」

大和は先程当麻から聞いたことを女の子改めインデックスに確かめ

る。

インデックスがコクンと頷いたことから間違いないようだ。

「おい大和 お前こいつの言うこと信じんのかよ？」

垣根が意味不明と言う表情で尋ねてくる。当麻も同感だと言わんばかりの表情をしている。信じるも何も聖人である大和にとって今回の件は立派な身内事なのだ。

イギリス清教、禁書目論、魔術結社、そして10万3千冊の禁書・
・全てが大和にとって全て知っている事だ。

（コイツら完全にオレの事疑ってやがるな・・・ 聖人の事はバレルと面倒だし上手く誤魔化すか・・・）

「別に信じてる訳じゃねェよ ただ世界は広い 能力ってもんがあるなら魔術ってもんがあっても不思議じゃねェだろ？それに“完全記憶能力” っていうのも実在する力だ その“歩く教会”とかいう服だって何かしら異能の力があったから当麻の右手に反応したんだろ？」

大和の言葉を聞いて垣根と当麻はなるほどといった表情をする。再び大和はインデックスを方に振り返えりと言葉を続ける。

「デメエはこれからどオするつもりだ？」

「そうだよ、俺の家にいるか？何なら鍵渡しておくぞ」

当麻も同じことを思ったのか大和に続いてインデックスに質問する。垣根も気になるのかインデックスの返事を待っている。

「ありがとう でもいいよ 出てく」

そう言うインデックスは破壊された玄関に向かって歩いて行く。

「何でだ？追われてんだったら此処でじっとしてりゃいいじゃねえか それにお前『外』の人間だろ？そんなカッコで出歩いてたらアンチスキルに捕まんぞ？」

垣根はインデックスに言うが彼女は首を横に振る。そして自分の服を掴む。

「この歩く教会は魔力でできているの だから敵はこの服の魔力を探知して追ってくるの・・・ その君に破壊されちゃったけど」

「だったら問題ないじゃねーか 発信源ぶっ壊したんだから探知は出来ないだろ？」

「だとしても『歩く教会が破壊された』という情報は敵に伝わっちゃうよ 簡単にいえばこの服は『要塞』並の防御力のある特殊な服なの 理由はどうあれ『要塞』が壊れたとわかったら何かしらの手は打ってくると思う」

「おいおいちょっと待てよ じゃ尚更放り出す訳にはいかねえじゃねえか 敵が追って来るのわかってんのに丸腰の奴放り出す程俺たちは鬼畜じゃねえぜ？」

垣根の言葉を聞いたインデックスはきよとした顔をしたが、直ぐににっこりと笑顔になると垣根と当麻に言った。

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」と。

その言葉を聞いて2人は言葉を失う。

優しい言葉の筈なのにその言葉にはどこか厳しさを感じた。

笑顔の筈なのにその目はとても悲しそうに感じた。

（地獄の底か・・・ 笑えねエなア・・・）

心の中で大和は呟いた。幼い頃から学園都市の暗部に、それもこの街の最深部に限りなく近い暗部に身を置いてきた大和にはその言葉をどれほどの決意で、どれほどの思いで言ったのかよくわかる。

大和は静かに立ち上がると2人に言う。

「もオいいだろ、コイツだって大丈夫だって言ってるんだから放って置きゃいいんだよ ホラ学校行け 早くしねエとマジで遅刻すっから」

大和の言葉を聞くと垣根もそうだな・・・と言って立ち上がる。インデックスもありがとうとだけ言う但当麻の学生寮から出て行ってしまった。

当麻が後を追いかけてしようとしたが大和は右手で当麻の肩を強く掴む。

「お人好しも大概にしろよテメエ 仮にアイツが何かに追われてるとしてテメエに何が出来んだア？ 自分の世話一つ出来ねエヤツが一丁前にヒーロー面してんじゃねエよ」

インデックスの気持ち痛い程よくわかるこそ大和はあえて当麻にキツく言ったのだ。このまま彼女を引き留めていれば十中八九、当麻に危険が及ぶ。彼女としてそんな事してまで引き留めては欲しくないだろう。

大和は彼女が忘れていった帽子を拾うと当麻に渡しながら言う。

「これはお前が持ってる　これはお前の起こした問題だから」

当麻に帽子を渡すと大和は学校に向かうべく玄関へと向かう。

「玄関のドアは直しておいてやる　オレと帝督は先に行くから遅れねェようにしろよ」

そう言う和大和は先に行ってしまった。後から垣根もそれに続く。時間的に急がないと遅刻する時間なのだが当麻は直ぐに立ち上がる事が出来なかった・・・。

「理事長、彼をお連れしました」

「ご苦労、下がってくれ」

アレイスターがそう言うのと案内人は訪問者を残すとフッと何処かへ消えてしまった。残ったのはアレイスターと訪問者の2人だけ。

「既に知っていると思うが学園都市に魔術側あちらの人間が侵入した人数は3人　3人共君がよく知る人物だ」

「わかっているなら何故直ぐに対処しない？遊んでいるのか・・・？」

「予想外の事に侵入者の内の1人である禁書目録に“未現物質”、“幻想殺し”、そして“事象選択”の3人が接触してしまってるね

対処しようにも出来ないのだよ」

「予想外だと？ ふざけるな 初めから貴様の手の内だろうが」

来訪者はあからさまに怒りを露わにする。対するアレイスターはただ笑みを浮かべるだけだ。

このままでは平行線を辿るだけだと判断した来訪者は話を次の段階へ進める事にした。

「オレにどうしろと言うのだアレイスター まさか身内同士で潰し合えとでも言うんじゃないだろうな？」

「まさか、私とてあちら側のゴタゴタに巻き込まれるのは勘弁願いたいところだ しかしこの街で起こってしまった問題である以上こちら側で対処しなければならぬ・・・」

「どうするつもりだ・・・？」

補習も終わり大和と垣根は自宅への帰路をとっていた。本来ならもう少し早く帰宅出来る予定だったのだが担任である月詠小萌と今後の打ち合わせなどをしている間に最終下校時刻を迎えてしまったのだ。

「何でお手伝いのオレたちがあのバカ共より帰るの遅くなるんだよオ！！！」

折角の夏休みを潰された上に帰りまで遅くなった事に不平不満をぶちまけていると垣根がなあ・・・と話し掛けてきた。

「俺たちさああのガキ本当に放って置いてよかったのか・・・？」

大和ははアーとため息を吐くと呆れた様に垣根に言う。

「いいに決まってるんだろ？オレたちがあのチンチクリン助ける必要もなけりゃ義理もねエ」

「そりゃそうだけどよお・・・」

「それにだ、お前だって面倒事はたくさんだろ？朝は魔術、昼は補習ときたらこっちの身が保たねエよ」

そこまで言う和大和はピクツと何かに反応した。一瞬頭の中でその正体を考えるも直ぐに答えを明らかにすると大和は垣根をチラツと見る。

垣根はまだ気付いてはいないようだ・・・。そう判断した大和は垣根の方を振り向く。

「あー帝督、オレ用事思いついたからさア悪イけど先に帰っといてくんねエ？明日の事はまた後で連絡すつから」

垣根は一瞬何かを考えていた様だが直ぐにわかったとだけ言うと共に自宅へと帰って行く。

垣根の姿が見えなくなるのを確認すると、大和は近くの路地裏へと入って行く。最終下校時刻を迎えている事もあってか路地裏は目に見える以上に暗く感じる。

路地裏の真ん中ぐらいまで歩くと大和は立ち止まり先程から薄々感

付いて気配に話し掛ける。

「隠れてねエで出て来いよストーカー野郎 それともこっちから引
つ張り出さねエと出てこれねエのか？」

「いや、その必要はないぜい大ちゃん^{やま}」

大和の声に応えたのは聞き覚えのある声だった・・・。

〈特別編〉

柵中の三臣（前書き）

今回は大和たちの中学時代の話です。過去編は不定期に投稿する予定です。

大和たちがインデックスと出会う一週間程前、垣根と当麻の2人は中学からの親友である神鬼大和の家に遊びに来ていた。リビングに大和と垣根と当麻、そして大和の同居人である絹旗最愛の計4人で世間話をしたり、直ぐ間近に迫っている夏休みの予定について話したりとおしゃべりに花を咲かせていた。

「そう言えば今日、中学の時の卒アル持って来たんだぜ」

そう言うとなを思ったのか垣根は自分のカバンから表紙に金色の文字でデカデカと「柵川中学 卒業アルバム」と書かれた分厚い本を引っ張り出した。

「へーえ卒アルかー 懐かしいな ていうか何でそんなもの持って来たんだ？」

「わかってねえな当麻 こんな時こそ卒業アルバム見て昔を懐かしむんじゃないか！」

そんなものなのかと当麻は隣の大和に尋ねるが大和は知らんと簡潔に答えるだけだった。

「みんなの中学時代のアルバムですか？超興味があります！！見てもいいですか？」

「どうぞどうぞ ていうか最愛ちゃん、大和の卒アル見た事ないの？」

「はい・・・大和さんはそういった話は超全く話しませんから」

「大和、お前ってヤツは！！何で最愛ちゃんに言わねえんだよ！！俺たち『柵中の三臣』の武勇伝を！！」

「うるせエ！！急にでつけエ声出すんじゃないやねエ！！何が『柵中の三臣』だ！！アレかなり恥ずかしかったんだぞ！！」

2人はそのまま言い争いを始める。仲が良いんだか悪いんだか正直わからないなど当麻ははあとため息を吐く。

「でも『柵中の三臣』か・・・懐かしいな 確かオレたちそう呼ばれてたよな・・・」

「超何ですか？その・・・『柵中の三臣』って」

何の事かさっぱりわからない絹旗は当麻に尋ねる。すると大和と言い争いをしていた垣根はくると絹旗の方を振り向くと説明し始める。

「俺たち3人の中学の総称、簡単に言えばあだ名みたいなもんだ」

「超大層なあだ名ですね・・・」

絹旗はまさかただのあだ名だとは思っていなかったのか半分拍子抜けの表情をしている。

「絹旗が言う通り今思えば随分大袈裟な名前だよなーあの時は何とも思ってたけどオレ達結構いろんな事したよなー」

昔を懐かしむ様に当麻はしみじみと言う。

「そりゃ言えてる 確かにちょっとやり過ぎたってのもあったよなあ まあ楽しかったからいいけど」

当麻に続いて垣根も笑いながら言う。

「ケツくっだらねエ あんなもん今思えばただのバカじゃねエか」

「まあバカってのは言えてるな でもお前だって結構楽しんでたじゃねえか」

垣根が茶化す様に大和に言う。大和はプイと顔を背けたがまあ楽しかったのは否定しねエと小さく呟いた。

「あの・・・3人は中学の時どんな感じで超過ごしてたのですか？」

やはり気になるのか絹旗は身をのりだす様に尋ねる。

「聞きたい？最愛ちゃん」

「はい！超聞きたいです！」

「聞いたところで面白くも何ともねエぞ」

「いいじゃないか大和 たまには中学の事思い出すのも悪くないぜ！」

「当麻・・・ テメエもかよ」

3対1。人数的にも場の雰囲気的にもこれ以上は無駄と判断した大和は勝手にしろ・・・と呟くとまたプイと顔を背けたしまった。

「決まりだな」

垣根はニヤリと顔を弛ませると意気揚々に話し始めた・・・。

『とある中学に3人の少年がいた。』

1人は一度見たら忘れないツンツン頭に不幸体質、右手に特異な力を持ち

1人はホストを思わせる様な服装に端正な顔立ち、誰も見た事ない力を使い

1人はどう見ても中学生とは思えない童顔と身長に左右色の違う瞳を持つ、学園都市最強の能力者

人々は普通でない3人の事をこう呼んだ・・・

『柵中の三臣』と』

土御門 元春（前書き）

誤字、脱字がありましたらお知らせください

土御門 元春

「まさかとは思ったがテメエだったとはな 土御門」

物影から現れたのは大和のクラスメイトにして今朝の補習メンバーの1人、土御門元春だった。

「いつから気付いてたのかにゃー？ 大ちゃん」

「最初からだよ 学校出て直ぐ誰かが後付けてるのはわかったが誰かまではわからなかったけどなァ」

「じゃあどうして付けてるのがオレだとわかったんだ？」

「それは企業秘密だ 何でもかんでも教えるつもりで思ってたのかァ？」

「それは言えてるぜよ」

するとピリピリピリと携帯の音になる。その着信音から自分の携帯ではないと大和は判断する。

携帯の音は土御門のもので彼は電話に出ると何も話さず最後にわかったただけ言うと言ぐに切ってしまった。

「それで、オレに何の用だァ？ くだらねェもんだったらブツ殺すぞ」

「そう慌てるもんじゃねえぜい大和 本題に入る前にいくつか聞きたい事あるんだけどいいかにゃー？」

「どオセダメって言っても聞くんだろ？ さっさと話せ」

大和がそう言うのと土御門はふうと息を吐くと大和に尋ね始めた。

「学園都市に3人程侵入者が入ったんだが大ちん知ってるかにゃー？」

「あア？ 知る訳ねエだろ」

「本当にゃー？ 大ちんはその内の1人に会っている筈ぜよ」

「はア？ テメエ何言って・・・！！」

そこまで言う和大和はハツとなる。

「その反応じゃ何か心当たりがあるみたいだにゃー」

大有りだ。おそらくその3人の侵入者の内1人はインデックスの事だろう。なら後の2人はインデックスを追っているという敵の事だろうか。

「あのチンチクリン・・・ やっぱり『外』から来たのかよ」

「じゃ2つ目の質問 大ちんが考えているのは多分禁書目録の事だと思いが彼女以外に侵入者らしき人物と接触したかにゃー？」

「してねエよ つーかオレもテメエに聞きてエ事あんだけどよオ」

「オレの質問が終わったら聞いてやるぜい 最後の質問 もしその侵入者が大ちんの前に現れたらどうするぜよ？」

「どオもしねエよ 面倒事に巻き込まれんのは御免だからな まアオレに向かってくんなら話は別だがなア」

「そうか・・・ 手前取らせて悪かったにゃー それでは本題に入るけど・・・」

「ちょっと待て」

土御門が本題に入ろうとするのを大和が止める。大和も是非土御門に聞きたい事があるのだ。

「先にオレにも質問させろ 本題に入んのはその後だ」

「んー確かにオレばかり話すのも悪いしにゃー いいぜい 何が聞きたいのかにゃー？」

「デメエ何もんだア？」

大和は端的に聞く。

コイツは明らかに普通のヤツじゃねエ、暗部の直感でそう感じたのだ。後の付け方も明らかにプロの付け方だった。今だってそうだ。話している間でもまるで隙一つない。

「デメエのした質問の内容は明らかに統括理事会クラス、それも理事長に近けエヤツじゃねエと知り得ない内容ばかりだ 侵入者の正確な人数、しかもその内1人の素性まで掴んでやがる そこら辺の下っ端じゃわからねエ筈だ」

「・・・」

「それにだ、テメエはインデックスの事を『彼女』と呼んだ 何でアイツが女だって知ってんだ？ しかも何の違和感なく『禁書目録』って言った 普通そんな名前だったら少しは疑うだろ」

「・・・・・・・・」

「これらから考えだせる事は2つ 1つはテメエは裏の人間で理事長に近いところにいる もう1つはどの位かは知らねエがある程度は魔術に関して知っている事だ 黙ってねエで何か言ったらどォだ？」

「・・・驚いたぜい まさかたったあれだけの情報でここまでわかるとはな・・・」

土御門は驚いているというよりも感心しているといった表情をしている。まさかこの短時間でここまで推理されるとは思ってもみなかっただろう。

観念したかの様に両手を挙げると土御門は再び話し始めた。

「大ちゃん『必要悪の教会』^{ネセサリウス}って知ってるかにゃー？」

「確かイギリス清教の暗部みてエなもんだっけ？」

「随分とアバウトだか簡単に言えばそんなところぜよ オレは必要悪の教会と学園都市のスパイ、つまり二重スパイってところなんだぜい」

なるほどなアと大和は納得する。必要悪の教会の一員なら当然魔術の事も禁書目録の事も知っている筈だ。それに学園都市のスパイと

なれば統括理事会、特に理事長であるアレイスターとの距離も近くなる。

「そろそろ本題に入るぜい 侵入者の後の2人は魔術師、おそらく必要悪の教会の人間ぜよ 大和ちゃんにはその魔術師の撃退、そして禁書目録の保護をしてもらいたいんだにゃー 後魔術師は殺したらダメだぜい」

「そんなところだと思っただぜ」

大和はやれやれといった表情をする。土御門は必要悪の教会の一員だからまず不可能、他の者を行かせるのも魔術の存在を知らないのダメだ。そうなれば消去法で大和にその役が回ってくる。しかも好都合なことに能力者でありながら魔術の存在を知っている。

「どオセアレイスターの命令だろ？オーケー引き受けたよ ただしオレがやんの撃退までだ 保護の方は他を当たれ」

「わかったぜい アレイスターにはオレからそう伝えておくぜよ」
するとまた土御門の携帯が鳴った。電話に出た土御門は一瞬目を見開いたかと思うと今度は無言で電話を切った。

「大ちゃん、早速お仕事ぜよ 魔術師の1人が戦闘を始めた しかも相手はカミやんだぜい」

「マジかよ・・・ アイツもとことん不幸なヤツだなア」

親友が闘っているというのにまるで驚かない大和。大和自身遅かれ早かれあのお人好しが魔術師とぶつかることは大体予想していたの

だ。

「仕事にはオレも同行させてもらうぜい　アレイスターからそう言われてるものでにゃー」

「当麻にバレたら色々面倒じゃねエの？」

「そこら辺は大丈夫だぜい」

何が大丈夫なのか大和にはわからなかったが本人がそう言うなら大丈夫なのだろうと大和は判断する。

「さアてオレの親友に手エ出したクソ野郎にきついお灸据えてやっかなア」

ニヤリと三日月の様に口を歪めると大和は戦場へと向かった。

ただの高校生（前書き）

初バトルです！！ お気に入り登録、ありがとうございます！！

ただの高校生

大和と別れた垣根は1人自宅へと帰っていた。途中コンビニにでも寄ろうかと思ったが最終下校時刻を迎えていることもあり風紀委員や警備員に見つかれば色々面倒なので真っ直ぐ帰ることにしたのだ。歩きながら垣根は先程の大和とのやり取りを思い返していた。

用事があるから先に帰ってくれ。

大和は垣根にそう言った。普段なら何も思わなかっただろう。だが今回は違った。

去り際に見た大和の目。その目は明らかに自分ではなく別の何かを捉えていた。中学からの親友である垣根だからこそわかる事だが。

（大和のやつ　また何か1人で抱えているな・・・）

別に何か確証がある訳ではない。親友としての直感でそう思ったのだ。

垣根はズボンのポケットから携帯を取り出すと何処かへ電話を掛け始めた。

「あーもしもし？俺だ、垣根だ　何？言われなくてもわかるって？相変わらず可愛げのねえやつだなあ」

「実はよちよちと調べて欲しい事あんだけどよ、人目に付く場所じゃ話せねえから例の場所に来てくれ　ああ？もちろん全員だ　今から1時間後に集合だ　いいな？」

そう言うと垣根は携帯を切る。そして再び歩き始めると心の中で呟く。

（さて『スクール』再始動といくかな・・・）

大和と土御門が魔術師と当麻が闘っているであろう当麻の学生寮に到着すると寮は炎に包まれており文字通り火の海の状態だった。

「この感じ・・・ ルーンの魔術か」

「ルーンって事はステイルのやつかにゃー？学園都市だというのに随分と派手な真似してるぜい　というか大ちゃん、どうしてルーンの魔術ってわかったんだ？」

「後で説明してやるよ　それよりもテメエはここに居ろ　魔術師の野郎ブツ飛ばしてくっからよ」

そう言う大和は寮に更に近づいて行った。

「さてさて、じゃあ土御門さんは高みの見物と行くかにゃー」

そう言う土御門は何事もなかったかの様に移動を始めるのだった。

「さてと、どうやって上まで行こうかねエ」

燃えさかる寮を見上げながら大和は魔術師に接近する方法を考えているとドーン！！と何が落ちて来た様な音が聞こえた。

何だ？と思って音のした方を見るとそこには痛つてえと言いながら腰を押さえている当麻がいた。

どこまでコイツに知られてもいいのかと大和は考えるがある程度は大丈夫だろうと勝手に判断すると大和は当麻に近づく。

「おい、大丈夫かよ当麻？」

「!?!?!? 何だ、大和か」

「人が折角心配してやってんのに何だとは失礼なヤツだなア」

当麻は何か言おうとしたが上から突然ゴォー！！と大きな音がした。何だ？と思って大和が上を見上げる。そこには炎で出来た巨人の様な物が2階の手すりを持ちながらこちらを見下ろしていた。

「魔女狩りの王か……イノケンティウス 随分と派手なもん使ってきやがったな」

「ど、どうしてあれの名前を知っているんだ!?!?」

「説明は後だ 話せば長くなるからなア それよりインデックスは何処だ？どオセテメエの事だ、アイツが絡んでるから闘ってんだろ？」

大和の言葉を聞くと当麻は少し笑いながら言った。

「インデックスの事……助けてくれるのか？」

「勘違いすんじゃないねエよ オレは親友に手エ出したヤツが許せねエ
だけだ あのチンチクリン助ける訳じゃねエ」

「素直じゃないなお前も でも・・・ありがとよ」

当麻は大和に礼を言うと言現在の状況を説明した。インデックスは当麻の家の玄関前に居て背中に重傷を負っている、そのため1人で動く事が出来ないと言うことだ。魔術師もそこにいるらしい。

「なるほどなア、オーケーわかったぜ オレが魔術師とやりあっている間にインデックス連れて逃げろ そんなもってどっかで治療してもらえ」

当麻にそう指示すると大和はゆっくりと上に続く階段を登り始める。後ろから当麻が1人で大丈夫か？と言うのが聞こえたので大和は階段の真ん中ぐらいで止まると前を向いたまま答える。

「安心しろ オレに勝てるヤツなんざ未来永劫現れやしねエよ」

（やつが戻って来ない・・・ 逃げ出したのか？）

タバコを吸いながらステイルは学生寮を飛び出してから戻って来ない当麻の事を考えていた。

魔女狩りの王に怯えて逃げたのだろうと考えたステイルはインデッ

クスを回収すべく彼女に近付こうとしたその時だった。
カーン、カーン、カーンとゆっくりと階段を登る音が聞こえてきたのだ。

（やつが戻って来たのか？ならどうしてこんなにゆっくりと階段を登れるんだ？）

魔女狩りの王は最新型の追尾式ミサイルのようなもので一度標的をロックすると殺すまで追い続ける。もし今階段を登って来ているのがやつなら当然魔女狩りの王に追われている筈、こんなにゆっくりと移動する余裕などない筈だ。

なら誰が？ 階段を登る音は徐々に近づいており最終的にステイルの居る階で止まった。

警戒心を強めているステイルの前に現れたのは当麻ではなく鮮やかな茶髪に両手をスボンのポケットに突っ込んだ大和だった。

当麻ではない事に少しホッとしたステイルは強めていた警戒心を緩め大和に言う。

「君は此処に住んでいる生徒かな？」

ステイルとしても無駄な争いは避けたかったので魔術師としての顔は伏せておく事にした。しかし次の大和の一言でその言葉の意味をなくす。

「下手クソな演技してんじゃねエよ、魔術師」

その言葉を聞いた瞬間、ステイルは緩めていた警戒心を再び最大にまで戻す。

「そうカリカリすんなよ イギリス清教必要悪の教会の魔術師、ス

テイルⅡマヌグスさんよオ」

その言葉にステイルは目を見張る。自分の正体を知られている。それでもステイルは出来るだけ表情に出さず冷静さを保とうとした。しかし・・・

「魔女狩りの王イノケンティウスか・・・こんな目立つ魔術、学園都市なんかで使うもんじゃねエぜ」

今度は驚きの表情を隠す事が出来なった。自分の素性を知っているばかりか、魔女狩りの王イノケンティウスの事まで知っていたのだから。ステイルはイノケンティウスと呟くと大和に尋ねる。

「君は魔術側しゅじゆの人間なのかい・・・？」

「まア正確に言えばハズレだけどなア 魔術に関しては知っている
もちろんテメエ等の事もインデックスの事もな」

「なら尚の事生かして帰す訳にはいかないな」

そう言うときステイルは炎の巨人に命令する。
殺せ、と。

主人の命令を聞き付けた巨人はそれに従いターゲット（大和）に迫る。

対する大和は何の抵抗もせず両手をポケットに入れたまま直ぐ目の前に迫ってくる魔女狩りの王イノケンティウスを眺めているだけだった。

ステイルは一緒呆気にとられたが魔女狩りの王イノケンティウスはそのまま大和を3000度の炎で包み込んだ。

（一般人相手に少しやり過ぎちゃったかな まあいい、これでやつ

もお終いだ)

ステイルが勝利を確信したその時だった。3000度の炎で焼かれている筈の大和が何事もなかったかの様にこちらに向かって歩いて来たのだ。

「残念でしたア こんなショボい魔術じゃあ当麻のヤツは殺せてもオレは殺せねェよ」

ステイルは言葉を失った。3000度の炎に包まれた筈なのに大和は火傷一つ、汗一つかいていなかったのだ。

「貴様!! 何故生きてられる!？」

「あア? 簡単だ、オレが魔女狩りの王に吞まれたっていう事象を拒絶したんだよ 流石に魔術に直接干涉すんのは難しいがオレの身体自体に起こった事象なら魔術だろうが何だろうが関係ねェよ」

事象を拒絶?

ステイルは訳がわからなかった。そんな力聞いた事もないし、仮に存在するとしたら最早人間の域を超えている。

「い、魔女狩りの王!!!!!!」

ステイルが叫ぶと魔女狩りの王は再び大和に突進する。

大和は目を閉じる。そしてゆっくりと目を開いたかと思うと、魔女狩りの王は大和の目の前で動きを止めた。そして見えない何か引つ張られるかの様に魔女狩りの王は空間に引きずり込まれてしまった。

「なっ、魔女狩りの王!!!!!!」

ステイルが叫ぶが何も起こらない。その様子を見て大和はニヤリと笑うと静かに言った。

「無駄だったの、テメエがいくら叫んだところで魔女狩りの王は戻って来ねエよ」
イノケンティウス

「どういう意味だ!？」

「魔女狩りの王は空間イノケンティウスごと別次元に飛ばした　つまり今アレはオレ達の知らねエ別世界に存在してるって事だ　いくら呼んでも反応する訳ねエだろ」

ステイルは呪文を唱え炎剣を作ろうとするが大和は聖人の脚力を使い一気にステイルとの距離を零にする。

「貴様は一体何者なんだ!!!!!!」

ステイルの質問に大和は右手で握り拳を作りながら答える。

「なんの変哲もねエただの高校生だよ」

大和の右ストレートがステイルの顔面に突き刺さり、向こうの壁まで吹き飛ぶとそのままステイルの意識が途絶えた。

もちろん手加減はした。聖人の力を全開にした状態で顔面を殴れば間違いなく顔の原形がなくなるか最悪の場合首から上が吹き飛ぶ。

大和はこのままステイルを殺したかったのだが土御門から殺すなど指示が出ていたので放って置く事にした。

大和とステイルの戦闘の一部始終を見ていた土御門は啞然としていた。

魔術に関してやたら詳しいかと思えば見た事もない力で魔女狩りの王を退け、おまけに聖人の力まで見せたのだ。
イノケンティウス

（何かあるやつだとは思っていたが・・・まさかここまでのものとは）

土御門が一番驚いたのは大和が聖人の力を完璧に使いこなしていた事だ。

世界に20人と居ないと言われている聖人はその強過ぎる力のあまり使いこなすのが難しいとされている。力を全開にするのはもちろん、先程の大和の様に手加減するのも非常に難しい。それを科学側の人間である筈の大和が、魔術側の力である聖人の力を完璧に使いこなしていたのだ。

「神鬼大和・・・お前は一体何者なんだ？」

土御門の謎はさらに深まったのだった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7279x/>

とある都市の事象選択《オールセレクト》

2011年10月26日14時03分発行